

AFRC



NEWS

URL:<http://unit.aist.go.jp/actfault/activef.html>

Active Fault Research Center



CONTENTS

トピックス

濃尾断層帯, 揖斐川断層および武儀川断層の
トレンチ調査と根尾谷断層の活断層露頭 (速報)

櫛挽断層のボーリング及びトレンチ調査

学会, 研究会参加報告

招待講演, セミナー

新聞, テレビ報道

発表論文

対外活動報告 (2008年12月, 2009年1月)



濃尾断層帯，揖斐川断層および武儀川断層のトレンチ調査と根尾谷断層の活断層露頭（速報）

金田 平太郎（活断層調査研究チーム）

はじめに

活断層研究センターでは、文部科学省からの委託事業として、全国の活断層の追加・補完調査を実施しています。本稿では、昨秋、その一環として実施した濃尾断層帯，揖斐川断層および武儀川断層のトレンチ調査について、その概要と暫定結果を報告します。また、ちょうどこの調査と時期を同じくして観察された根尾谷断層の活断層露頭についても、簡単に報告したいと思います。

濃尾断層帯とえば、1891年濃尾地震の際に連動的に活動した温見断層，根尾谷断層，梅原断層を連想しますが、今回調査対象となった揖斐川断層・武儀川断層は根尾谷断層に浅い角度で交差する左横ずれ断層で、濃尾地震時には活動しなかったと考えられています(図1)。これまでのトレンチ調査により、

揖斐川断層の最新活動はおよそ1000~2000年前であったことが推定されていますが(吉岡ほか, 2002)，武儀川断層の活動履歴についてはほとんど明らかになっていません(吉岡ほか, 2001)。今回の調査の第一の目的は、これらの活断層の活動時期・活動間隔をより詳細に明らかにして地域の地震危険度評価に資することですが、活断層の連動の解明という基礎科学的な観点からは、1891年に活動した他の活断層群との活動時期の比較や連動関係も興味あるところ です。

武儀川断層奥谷平曾洞地点トレンチ

用地交渉や役所への各種許可申請に予想以上に時間がかかったこともあり、実際のトレンチ調査を開始できたのは秋も深まった10月下旬のことでした。

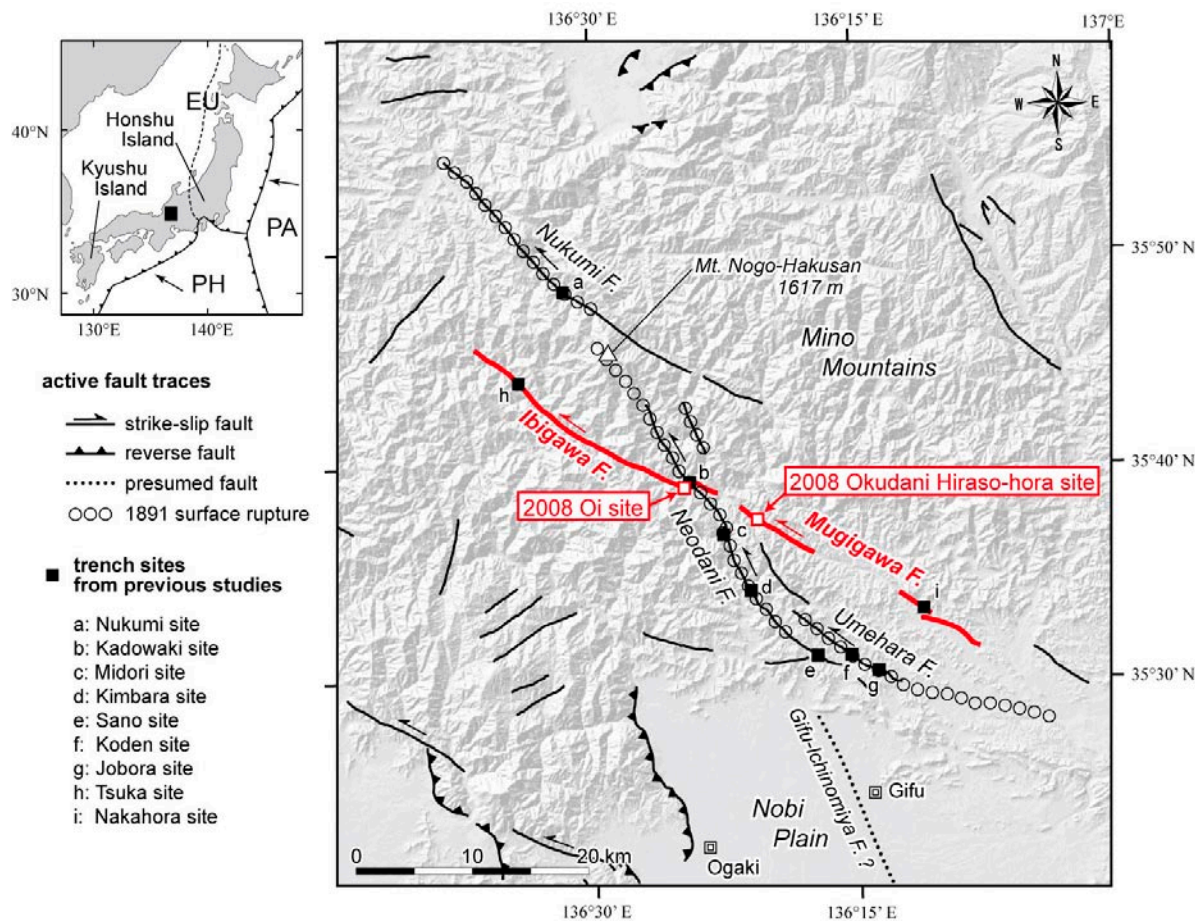


図1 揖斐川断層・武儀川断層の位置および2008年トレンチ調査地点。

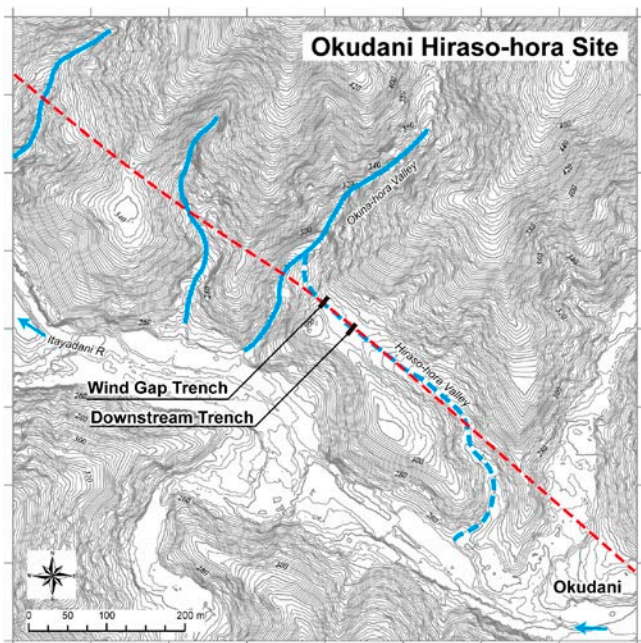


図2 奥谷平曾洞地点におけるトレンチ掘削位置。

まず、武儀川断層西部の奥谷平曾洞地点おくだにひらそほらのトレンチ掘削を開始しました。調査地周辺は武儀川断層沿いで最も明瞭な尾根・谷の左横ずれ屈曲が認められる場所ですが、そのうちの1本の谷は河川争奪により上流部が奪われ、断層上に幅狭い風隙（ウィンドギャップ）が形成されています（図2）。この風隙を完全に横断する形で1孔（風隙トレンチ）、その50 mほど下流側でもう1孔（下流側トレンチ）、計2孔のトレンチ掘削を行いました。現場には戦前まで人家一軒と畑があったそうですが、現在は山深い植林地となっていて大型の重機は搬入できません。そのため、トレンチの深さはいずれも約1.5 mとしました。

風隙トレンチでは、河川争奪前の土石流性谷埋め堆積物を切るやや不明瞭な断層が出現しました（図3・4）。この断層は谷埋め堆積物を覆う黄褐色の礫混じりシルト層も変形させているように見えますが、その上位の厚い腐植質堆積物中の変形はよく分かりません。これまで得られている年代測定結果によれば、黄褐色シルト層の堆積年代はおおよそ1000年前で、これ以降に武儀川断層が活動したことは間違いなさそうです。また、土石流性谷埋め堆積物の中からは5000~6000年前の年代を示す木片が得られており、河川争奪はこれ以降に起こったと考えられます。なお、トレンチの埋め戻し時に断層部分を深掘りし、破碎した基盤岩中の明瞭な断層面および



図3 奥谷平曾洞地点、風隙トレンチの全景写真。北をのぞむ。河川争奪により形成された風隙を完全に横断する形で掘削を行った。黄色矢印は断層出現位置を示す。



図4 奥谷平曾洞地点、風隙トレンチ南東壁面の写真。断層推定位置を黄色矢印で示した。グリッド間隔は1 m。

基盤上面の上下変位（約20 cm）を確認することができました。

下流側トレンチは、支流性沖積錐に下流側を堰き止められたために形成された小規模な凹地で掘削しました（図2）。風隙トレンチより堆積速度が速く（＝時間分解能が高く）、年代測定試料が得られる可能性もより高いと考えられたために計画したトレンチでしたが、断層は当初の期待よりも北東側を走っていたらしく、残念ながら断層を捉えることはできませんでした。トレンチ孔を北東に延長することも考えましたが、成長した杉を伐採する必要があることや、たとえ延長掘削したとしてもそこでは細粒堆積物は期待できないことから断念しました。

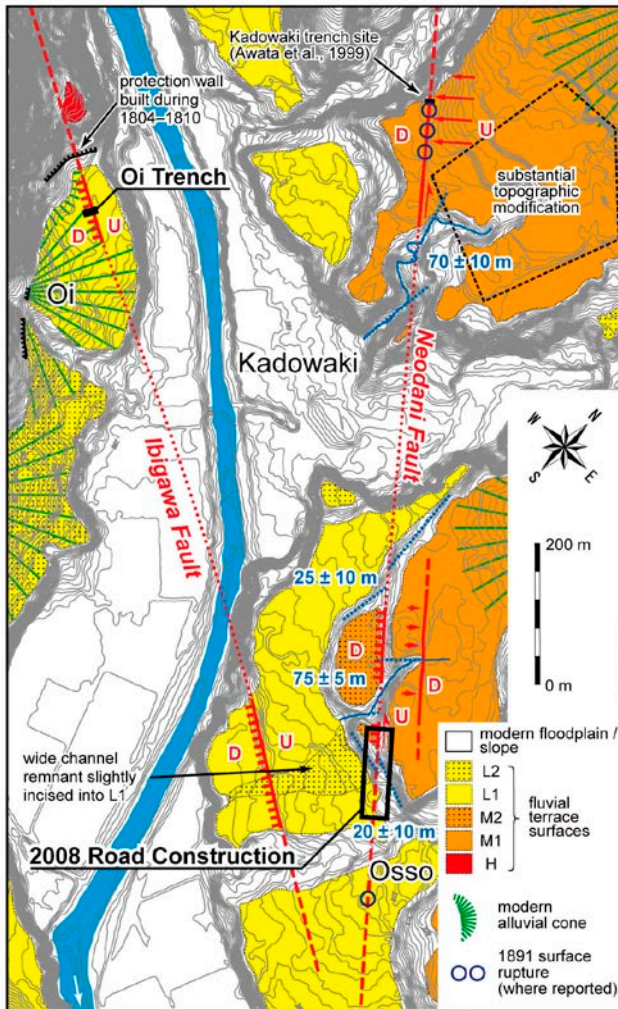


図5 大井地点トレンチ掘削位置と門脇バイパス工事区間。Kaneda and Okada (2008) を一部修正。



図6 大井に残る江戸時代の猪垣。断層による変位は認められないことから、この猪垣築造以降、揖斐川断層は動いていないと考えられる。

揖斐川断層大井地点トレンチ調査

奥谷平曾洞地点のトレンチ掘削に引き続き、11月初旬に揖斐川断層大井地点におけるトレンチ調査を開始しました。大井地点は、揖斐川断層の南東端部、根尾谷断層の直近に位置し(図1)、ここでは、根尾西谷川右岸の低位段丘面上に高さ50cm程度の逆向き低断層崖が形成されています(図5)。対岸の段丘面上を走る根尾谷断層は濃尾地震時に6mも横ずれ変位しているため、この逆向き低崖も濃尾地震時に形成された可能性がまず疑われますが、江戸時代末期に築かれた獣除けの土塁(猪垣あるいは猪鹿垣、図6)が断層をまたいで素直に連続しており、この断層が濃尾地震時に大きく動いたとは考えられません(Kaneda and Okada, 2008)。

大井地点では、夏に行った事前簡易ボーリング調査により、低下側地下に厚さ3m以上の細粒な堰き止め堆積物(ダムアップ堆積物)が存在することが判明していました。つまり、地表で見えている低崖は氷山の一角で、地下には大きな断層崖が埋没していることになります。そこで、トレンチには犬走り(いぬごし)を設け、最大深さ4mを超えるかなり大規模な掘削を計画しました。

2日間にわたるトレンチ掘削の結果、低位段丘構成礫層を上下に約4m食い違わせる明瞭な断層が露出しました(図7)。断層はみかけ正断層状を呈しており、低下側ダムアップ堆積物には、断層に向かって引きずり上がるような変形が認められます。また、断層近傍では段丘礫が直立している様子が確認できるほか、ダムアップ堆積物中の一部には副次的な逆断層変位も認められました。詳細については検討中ですが、こうした堆積物の変形・変位の程度の相違から、この低位段丘面離水以降、4回程度の断層運動があったと解釈しています。現在得られている年代測定結果によると、ダムアップ堆積物の堆積開始年代は15000年前程度のようなので、上の解釈が正しいとするとこの断層の平均的な活動間隔は4000年とか5000年といったオーダーということになります。最新活動時期についても年代測定結果、テフラ分析結果等を併せて検討を進めています。イベント層準を正確に特定できないため、残念ながら精度の高い議論は難しそうです。



図7 大井トレンチ北西壁面の写真。左側のダムアップ堆積物と右側の低位段丘礫層が見かけ高角の正断層を境に接している。断層近傍ではダムアップ堆積物のたわみ上がりと段丘礫の直立が明瞭。グリッド間隔は1 m。

国道バイパス工事に伴う根尾谷断層の活断層露頭

揖斐川断層・武儀川断層トレンチ調査の用地検討・交渉のため根尾谷に足繁く通っていた昨年初夏、長らくチャンスをおぼそかかっていた国道157号線門脇バイパス越卒区間のオープンカット工事がついに開始されました(図5)。根尾谷断層の主トレースに沿うこの道路計画を知ったのは2002年か2003年のことでしたが、すぐにでもはじまりそうだった工事は財政難(?)で毎年のように延期になったため、以後、半年に1度の割合で最新の工事計画を問い合わせ続けることとなりました。この間に岐阜建設事務所は岐阜土木事務所に名前を変え、工事担当者も変わることも3度、しかし甲斐あって、ようやくこのチャンスに巡りあいました。連絡を下さった岐阜土木事務所の高木庸光さんに感謝します。

断層はほぼ予想通りの場所にほぼ予想通りの形で露出し、空中写真による活断層判読が正しかったことが示されました。計画道路のほぼ中央を境に北東側には破碎した基盤岩、南西側には中位段丘構成礫層が露出し、その境界はナイフで切ったように直線的です(図8)。断層横断方向の法面では、破碎基盤岩が中位段丘構成礫層に約70度の角度でのし



図8 門脇バイパス工事で現れた根尾谷断層の露頭(2008年7月16日撮影)。北西方向をのぞむ。断層すぐ右側の白い棒の長さは1 m。左手の黒っぽい部分は法面整形時に表面に張り付いたもの。

上げており、礫層堆積後にこの断層が活動したことは明らかです。この礫層中に挟まる腐植質泥層には材が含まれており、うち3点を年代測定したところ、いずれからも約 34000 yBP（暦年補正して約 4 万年前）の年代が得られました。1891 年濃尾地震の際にもこの断層が動いたものと考えられますので、道路センターラインに沿って断層がずれるということは当分の間はなさそうです。

この断層露頭は現在も観察可能ですが、道路底面の直線的な断層が観察できたのは結局、最初にこの露頭を訪れたときのみでした。来年度以降、断層沿いにバイパス工事がさらに進む予定ですので、工事の進捗状況にひきつづき注視してゆきたいと考えています。

おわりに

昨年 5 月の下見にはじまった今年度の揖斐川・武儀川断層調査は 12 月 17 日の奥谷平曾洞トレンチの埋め戻しをもって、無事終了しました。その間、のべ 60 日以上を根尾谷で過ごしましたが、新緑の中の用地探し、真夏の炎天下の用地交渉とボーリング調査、紅葉の山でのトレンチ掘削、そして寒さ・雪との闘いと季節はあっという間に巡ってゆきました。特に、11 月半ばには、この時期としては 30 年ぶりという予想外の大雪に見舞われ、一時は先が危ぶまれました（図 9）。そんな中、大きな事故・トラブルもなく調査を終了できたことは、調査を請け負っていただいたダイヤコンサルタントの佐護浩一さん、ほぼ全日程にわたって調査を手伝っていただいた井上 勉さんほか皆様のご尽力・ご協力のおかげと感謝しています。土地所有者・耕作者の方々には快く調査を許可していただいたほか、岐阜土木事務所および本巣市の関係部署の方々にも大変お世話になりました。下見段階から何度も根尾谷

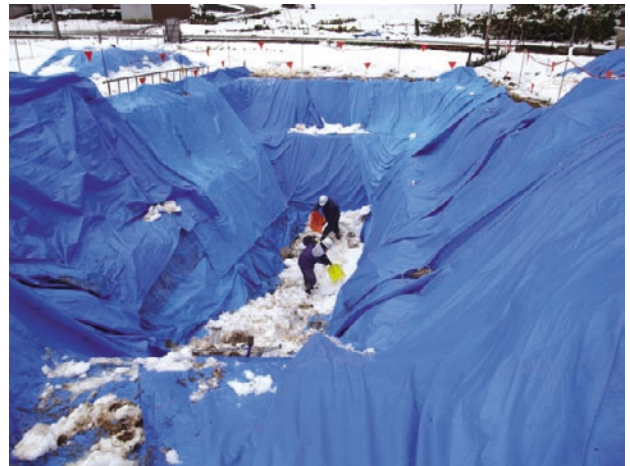


図 9 11 月半ばとしては 30 年ぶりという大雪に見舞われた大井トレンチ。

に足を運んで下さった立命館大学の岡田篤正先生にはさまざまな有益なご助言をいただきました。その他、多くの方々のご厚意とご協力に助けられました。最後になりましたが、この場を借りて心より感謝したいと思います。

引用文献

- Kaneda, H. and A. Okada (2008), Long-term seismic behavior of a fault involved in a multiple-fault rupture: insights from tectonic geomorphology along the Neodani fault, central Japan, *Bull. Seismol. Soc. Am.*, 98, 2170-2190.
- 吉岡敏和・荻谷愛彦・吾妻 崇・松崎達二・川崎輝雄 (2001), 武儀川断層の活動履歴調査, 活断層・古地震研究報告, 1, 107-114.
- 吉岡敏和・栗田泰夫・佐々木俊法・田中竹延・柳田 誠 (2002), 揖斐川断層の活動履歴調査, 活断層・古地震研究報告, 2, 81-89.

くしびき 櫛挽断層のボーリング及びトレンチ調査

杉山雄一

1. ボーリング調査

文部科学省委託「活断層の追加・補完調査」の一環として、埼玉県の櫛挽断層とその西方延長に当たり、埼玉・群馬両県に跨る神川断層のボーリング調査を10月末から12月にかけて行った。櫛挽断層の調査は埼玉県寄居町用土地地区、神川断層の調査は群馬県藤岡市本郷地区で実施した。ボーリングは、両断層の通過が予想された段丘面上の、それぞれ約2mと1mの段差がある崖を挟んで、それぞれ隆起側に7本、沈降側に3本掘削した。深さは浅いもので6m、一番深いものは15mで、孔井間隔は2～10m程度で掘削した。

寄居町用土地地区では厚さ約5mの砂礫層の上面が上下に約3m変位しているのが判明した(図1)。礫層の直上と直下の腐植質層からは、それぞれ約2万9千年前と約4万4千年前の¹⁴C年代が得られたことから、櫛挽断層の上下変位速度は0.1m/千年程度と推定される。上盤側では礫層直下に新第三系基盤が存在する。約14m離れた2つのボーリング孔で上盤側の地層が下盤側の地層の上に載るのが確認され、この間の断層の傾斜は約26度と推定される。最新の活動については、約9千年前及び8千年前の¹⁴C年代を示す上盤側の腐植層が、約3千年前及び2千年前の¹⁴C年代を示す下盤側の腐植層と、約4.5m

の距離を置いて、ほぼ同じ標高にあることから、上記2つの年代の間に生じた可能性がある。

藤岡市本郷地区では、砂礫層及びこれを覆うシルト層に挟まれるAT火山灰及びAs-BP火山灰層が、神川断層によって約1m上下に変位していることが明らかになった(図2)。この調査結果は、群馬県(1998)による神川断層の調査結果を支持する。

2. トレンチ調査

寄居町用土地地区では、ボーリング調査結果を受けて、阪神コンサルタンツと産総研の共同研究により、平成21年2月2日からトレンチ調査を開始した。トレンチ壁面には明瞭な断層(傾斜30度程度の逆断層)が出現し、ボーリング調査で約1万年前から2千年前の年代が得られている黒土層の下半を切り、同層の上部に覆われている(写真1,2)。黒土層基底(約1万年前)の上下変位量は約1m程度。ボーリングにより、3～4万年前に堆積した砂礫層上面(約3万年前)の上下変位量は約3mであることから、変位の累積性が認められる。また東側壁面では、最新活動時に活動した断層とは別の断層が認められ、より古い時代(砂礫層堆積後)の活動を示す変形・被覆関係と判断される構造が観察される。

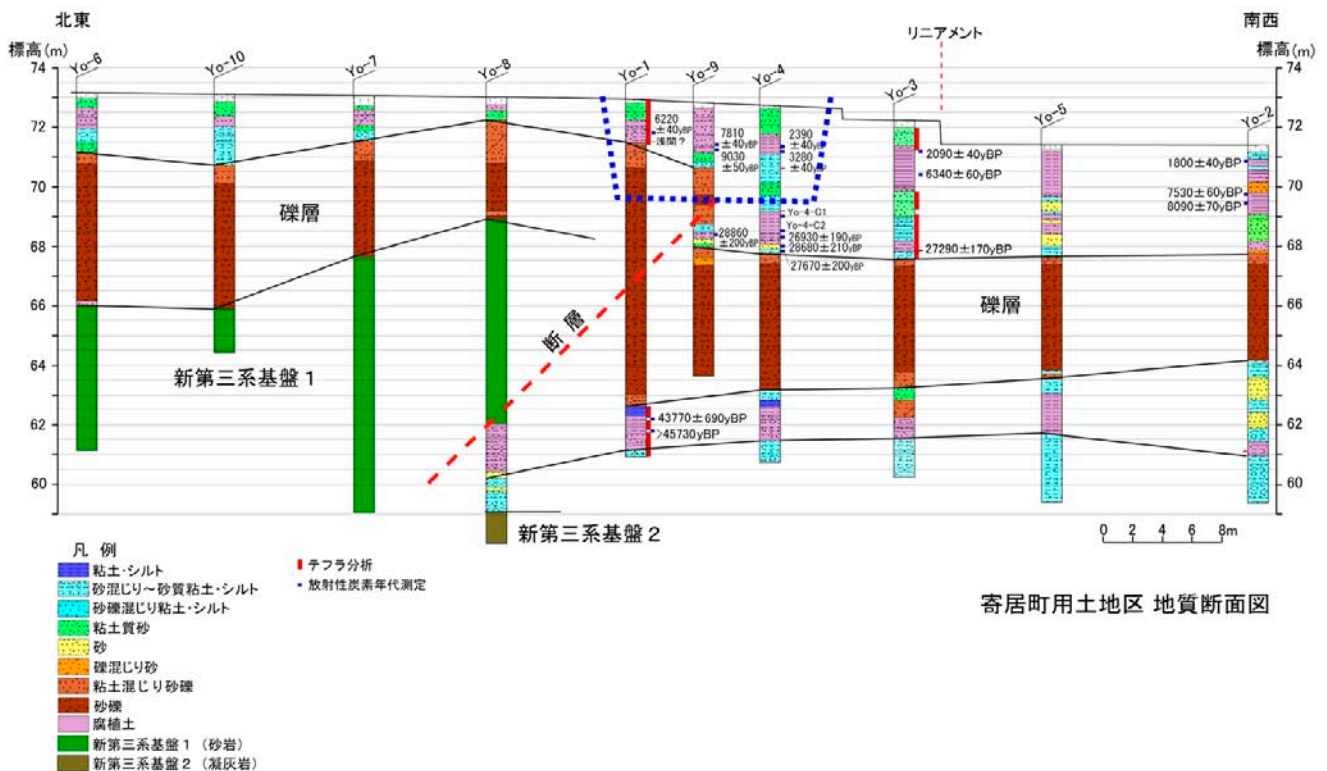


図1 櫛挽断層のボーリング調査結果とトレンチ掘削概略位置(青破線部)。

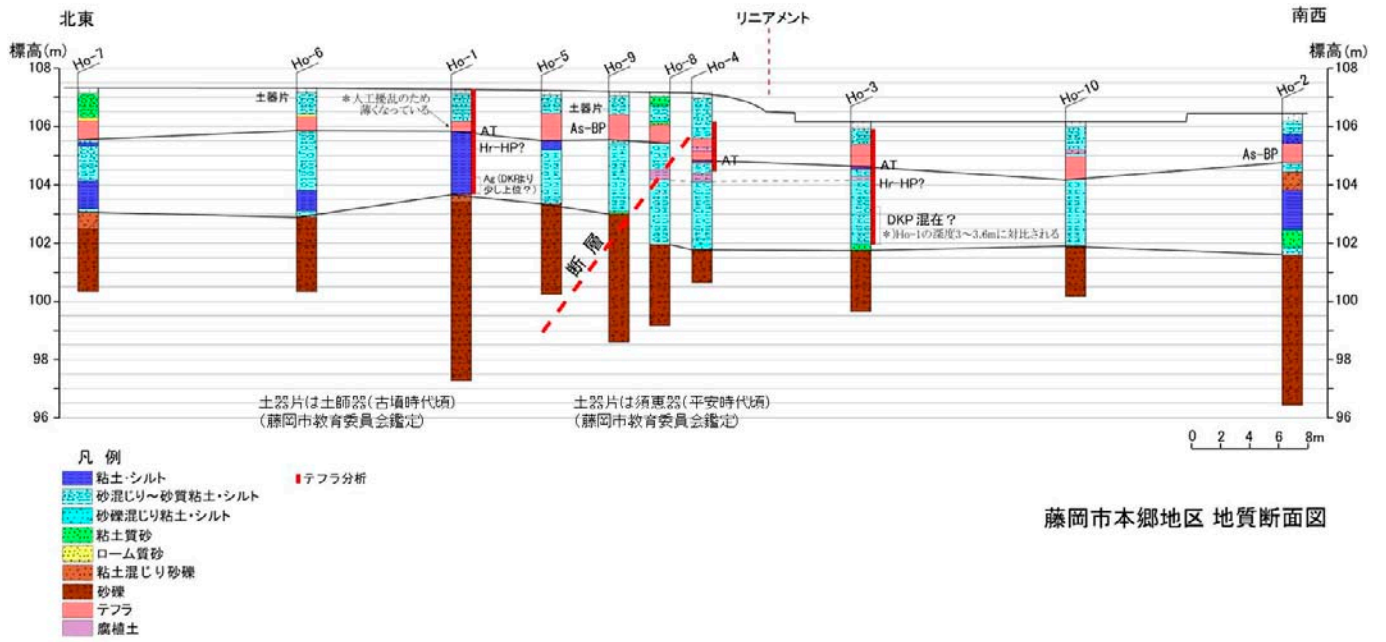


図2 神川断層のボーリング調査結果.



写真1 櫛挽断層用土地区トレンチ東側壁面の様子.



写真2 櫛挽断層用土地区トレンチ西側壁面の様子.

学会，研究会参加報告



2009年1月7日-9日

The 4th International Workshop on the Kanto Asperity Project

宍倉正展

関東アスペリティプロジェクト (KAP) の第4回の国際ワークショップが産総研の共用講堂を会場に行われた。KAPは相模湾および房総沖合での海洋掘削により、プレート沈み込みに伴う諸現象を理解することを目的としたプロジェクトで、IODPへのプロポーサルを提出している。本ワークショップのねらいは、国内外から各分野の専門家を集め、すでに提出済みのプロポーサルの改訂に関する議論を行うことである。筆者もコアメンバーの一人として、おもに古地震について意見の集約を行った。

2日間のワークショップの後、参加者の一部はそのまま三浦半島に移動し、3日目は巡検を行った。筆者は歴史地震に関連する隆起汀線や更新世海成段丘とそれを覆うテフラについて案内した。

今回は産総研での開催であったことから、会場の準備や海外からの招待者の送迎などロジスティクスの部分で苦労した。特に懇親会は30人分の予約をしていたところ、当日の昼過ぎになっても13人しか参加が見込めず、大幅な赤字(自腹)を覚悟したが、その後、産総研内の職員に声をかけるなどしてなんとか目標数に達することができた。懇親会に参加していただいた方々にこの場を借りて感謝を申し上げたい。

2009年1月21日-22日

International Workshop on Tsunami and Storm Surge Hazard Assessment and Management for Bangladesh

宍倉正展

バングラデシュの首都ダッカにおいて標記のワークショップが開催された。これはバングラデシュ政府 (Ministry of Food and Disaster Management) の Comprehensive Disaster Management Program (CDMP) が主催し、CDMPで実施した津波や高潮の被害想定をレビューすること、それに関連して海外の専門家から話題提供や意見をもらい議論すること、などを目的に行われた。インドやタイ、マレーシアなど周辺各国から11名の専門家が招聘され、日本からは筆者の他、東大地震研の佐竹氏とOYO Internationalの金子氏が座長や話題提供を行った。

オープニングセレモニーでは、Ministry of Food and Disaster Managementの大臣も出席して挨拶を行い、テレビ局の取材も来ていた(写真1)。テクニカルセッションでは、まずバングラデシュ側から Institute of Water Modelingによるレポート発表があった。津波浸水シミュレーションの計算は手法自体は正しいようであったが、

その初期条件である断層の位置や長さなど、バックグラウンドに関する知識が稚拙であるように感じた。その後、各国からの参加者が話題提供を行ったが、本地域で最も重要な評価対象である1762年ベンガル地震について、バングラデシュやインドの研究者は低角逆断層による巨大地震の発生に否定的であった。一方、筆者はミャンマー西海岸での調査から1762年地震の地形、地質学的証拠を提示し、海岸が大きく隆起したことを報告した。特に、筆者は今回のワークショップの直前に、ミャンマー西海岸から続くバングラデシュ南東部の沿岸に実際に行き、海岸段丘の存在を確かめており(写真2;おそらくバングラデシュで初めての報告)、その報告は大きな注目を集めた。しかしながらまだ海岸段丘の存在の意味などがいまいち理解されておらず、バングラデシュでは古地震学的研究がかなり遅れている印象を受けた。逆に言えばまだ誰も手をつけていない研究対象が豊富に存在するということの証であり、今後の研究の進展に期待が持てる。

なお、今回のワークショップへの参加および現地調査はOYO Internationalの森野氏のご尽力により実現した。記して謝意を表します。



写真1 ワークショップ開会式の様子。壇上には大臣と一緒に佐竹氏も主賓として並んだ。

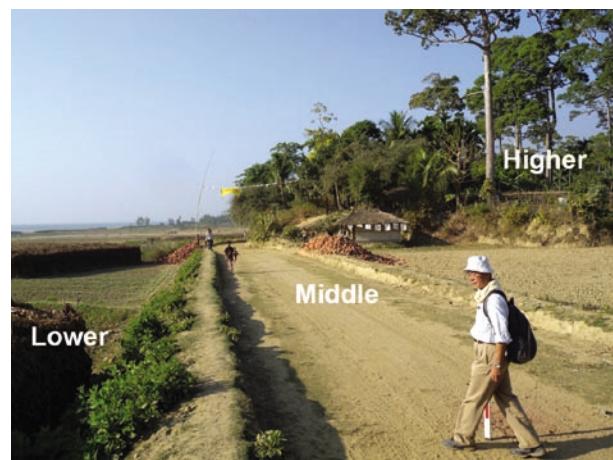


写真2 バングラデシュ南東部沿岸で確認した3段の海岸段丘。低位の段丘が1762年ベンガル地震で離水した可能性がある。また、中位、高位の段丘もミャンマー西海岸の段丘と対比できる可能性が高い。しかし、今回はわずか1日だけの調査のため、年代試料は得られていない。

招待講演, セミナー



2009年1月24日

勝浦市津波ハザードマップ作成ワークショップ

宍倉正展

一昨年度から千葉県沿岸の各市町村で順次開催されてきた標記ワークショップも、今回は最後となった。今回は勝浦市での開催である。勝浦市沿岸はリアスの海岸であることから、場所によって津波高が高くなる場所もあるが、反面、避難できる丘も近く、ハザードマップにもそれを反映させていた。

勝浦市は筆者の地元ともいえる場所であったことから、知り合いも多く、講演は少々やりにくい面があったものの、逆に地元ならではのネタを用いながら地震・津波の知識普及に貢献することができたと感じている。

新聞, テレビ報道



2009年1月17日 朝日新聞 夕刊3面

過去の地震知り備えを

寒川 旭

1995年1月15日の市民向け講演会で神戸市の西求女塚古墳が伏見地震で壊れたことを話したが、二日後に兵庫県南部地震が発生した。それまで「関西は地震が無い」という誤解があったが、地震の歴史を知ることの大切さが認識され、活断層の履歴調査が進展し、遺跡の地震痕跡の重要性も認識された。地震の被害は地形や地盤によって異なるので、自分たちが暮らしている土地の履歴を知ることが大切である。

発表論文

Evidence for coseismic and aseismic uplift in the last 1000 years in the focal area of a shallow thrust earthquake on the Noto Peninsula, west-central Japan

Masanobu Shishikura, Tomoo Echigo, and Yuichi Namegaya
Geophys. Res. Lett., 36, L02307, doi:10.1029/2008GL036252

Raised shorelines on the Noto Peninsula on the western coast of central Japan suggest a millennial history of recurrent uplift. Emergence of the coastline by up to 50 cm was recently recorded in association with a moderate earthquake (Mw 6.7) on 25 March 2007. The shoreline uplift is indicated by the displacement of sessile organisms such as calcareous tubeworms, which can also be examined as indicators of past shifts in shoreline level. Three levels of pre-2007 paleo-shorelines are thus identified on this stretch of the Japan Sea coast. The lowest of these, dated at AD 1720-1950, tilts northward away from the likely source of a pair of ca. M 6.4 earthquakes in 1892, which occurred in a different area to the 2007 earthquake. The middle paleo-shoreline, dated at AD 1430-1655, records a 30-40 cm emergence that may be aseismic. The high paleo-shoreline, dated at AD 1025-1235, records a coseismic uplift of 50 cm and is limited to the area raised coseismically in 2007. The most recent event preceding the 2007 earthquake thus appears to have occurred approximately 1000 years ago.

活断層研究センター活動報告
(2008年12月～2009年1月)

2008年12月1日

原子力安全委員会 耐震安全性評価特別委員会 地震・地震動評価委員会 第14回会合（加瀬出席 / 東京）

東京電力株式会社 柏崎刈羽原子力発電所の敷地周辺の地質・地質構造および基準地震動の策定についての説明および質疑応答が行われた。

2008年12月2日

新潟県地震・地質小委員会（杉山出席 / 新潟）
柏崎刈羽原発の耐震安全性について議論した。

2008年12月3日

地震動予測地図高度化WG（杉山出席 / 東京）

地震動予測地図2009年版の内容，特に図の表現について議論した。

2008年12月8日

原子力安全委員会 耐震安全性評価特別委員会 第12回会合（加瀬出席 / 東京）

東京電力株式会社 柏崎刈羽原子力発電所の基準地震動評価等に係る保安院中間報告書に対する見解について，審議が行われた。

2008年12月8日

12月定例地震調査委員会（杉山出席 / 東京）

岩手・宮城内陸地震の最新成果について議論した。

2008年12月9日

新しい総合的かつ基本的な施策に関する専門委員会（杉山出席 / 東京）

新しい総合基本施策が決定され，委員会を終了した。

2008年12月10日

原子力安全委員会 耐震安全性評価特別委員会 地震・地震動評価委員会及び施設健全性評価委員会 WG3 第5回会合（加瀬出席 / 東京）

中国電力株式会社 島根原子力発電所の検討用地震の選定について，説明および質疑応答が行われた。

2008年12月11日

保安院地震・津波，地質・地盤合同WG（杉山・岡村出席 / 東京）

2008年12月16日

保安院地震・津波，地質・地盤合同WG（杉山出席 / 東京）
柏崎刈羽原発の耐震安全性について審議した。

2008年12月17日

地震調査研究推進本部地震調査委員会第142回長期評価部会（吉岡出席 / 東京）

2008年12月17日

新潟県地震・地質小委員会（杉山出席 / 新潟）
佐渡海盆東縁断層の存否等について議論した。

2008年12月24日

地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会第42回活断層評価分科会（吉岡出席 / 東京）

2008年12月25日

JNES 設計用地震動規準検討会（第1回）（杉山出席 / 東京）
検討会の目的，審議の進め方について説明があった。

2009年1月6日

原子力安全委員会 耐震安全性評価特別委員会 地震・地震動評価委員会及び施設健全性評価委員会 WG3 第6回会合（加瀬出席 / 東京）

中国電力株式会社 島根原子力発電所の敷地周辺・敷地近傍の地質・地質構造，および，検討用地震の選定について，説明および質疑応答が行われた。

2009年1月6日

原子力安全委員会 耐震安全性評価特別委員会 地震・地震動評価委員会及び施設健全性評価委員会 WG2 第4回会合（加瀬出席 / 東京）

北陸電力株式会社 志賀原子力発電所の概要と活断層の調査・認定について，説明および質疑応答が行われた。

2009年1月9日

1月定例地震調査委員会（杉山出席 / 東京）

茨城県沖の地震の長期評価案などについて議論した。

2009年1月14日

保安院地震・津波，地質・地盤合同WG（杉山・岡村出席 / 東京）

柏崎刈羽発電所の地盤変動などについて審議した。

2009年1月15日

原子力安全委員会 耐震安全性評価特別委員会 地震・地震動評価委員会及び施設健全性評価委員会 WG2 第5回会合（加瀬出席 / 加瀬）

北陸電力株式会社 志賀原子力発電所の敷地周辺・敷地近傍の活断層の調査・認定，基準地震動の策定について，説明および質疑応答が行われた。

2009年1月20日

地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会第43回活断層評価分科会（吉岡出席 / 東京）

2009年1月20日

原子力安全委員会 耐震安全性評価特別委員会 地震・地震動評価委員会及び施設健全性評価委員会 WG2 第7回会合（加瀬出席 / 東京）

北陸電力株式会社 志賀原子力発電所の基準地震動について，説明および質疑応答が行われた。

2009年1月21日

新潟県地震・地質小委員会（杉山出席 / 新潟）
小委員会の「これまでの検討結果」について議論した。

2009年1月21日

原子力安全委員会 耐震安全性評価特別委員会 地震・地震動評価委員会及び施設健全性評価委員会 WG3 第8回会合（加瀬出席 / 東京）
中国電力株式会社 島根原子力発電所の基準地震動策定のための応答スペクトルと地震発生層について、説明および質疑応答が行われた。

2009年1月22日

原子力安全委員会 耐震安全性評価特別委員会 地震・地震動評価委員会及び施設健全性評価委員会 WG3 第9回会合（加瀬出席 / 東京）
中国電力株式会社 島根原子力発電所の敷地周辺の活断層の評価について、説明および質疑応答が行われた。

2009年1月22日

原子力安全委員会 耐震安全性評価特別委員会 地震・地震動評価委員会及び施設健全性評価委員会 WG2 第8回会合（加瀬出席 / 東京）
北陸電力株式会社 志賀原子力発電所の敷地周辺の活断層の評価、および、基準地震動について、説明および質疑応答が行われた。

2009年1月23日

保安院地震・津波、地質・地盤合同WG（杉山・岡村出席 / 東京）
柏崎刈羽発電所の耐震安全性に関する保安院の取りまとめが了承された。

2009年1月28日

原子力安全委員会 耐震安全性評価特別委員会 解析技術等作業会合（加瀬出席 / 東京）
北陸電力株式会社 志賀原子力発電所の基準地震動に関連して、活断層の連動性についての説明および質疑応答が行われた。

2009年1月28日

地震調査研究推進本部地震調査委員会第143回長期評価部会（吉岡出席 / 東京）

2009年1月30日

原子力安全委員会 耐震安全性評価特別委員会 地震・地震動評価委員会及び施設健全性評価委員会 WG2 第11回会合（加瀬出席 / 東京）
北陸電力株式会社 志賀原子力発電所の基準地震動のための震源モデルについて、説明および質疑応答が行われた。